教職課程における協働的な取り組みに関する研究
―教職実践演習の「教員の責任感・使命感・教育的愛情、保護者対応」に焦点を当てて―

楊　　川・藤　　勝宣

はじめに

本稿は、教職課程の集大成の科目である教職実践演習の授業実践を分析し、特に「教員の責任感・使命感・教育的愛情、保護者対応」の内容に焦点を当て、九州国際大学（以下「本学」という。）教職課程における協働的な取り組みの成果と課題を析出することを目的とする。

2006年、中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」が出され、今後の教員養成・免許制度の改革の基本的方向と、それを実現するための方策が提示された。また、教職課程の質的水準の向上や採用、研修及び人事管理等の改善・充実等、教員の資質能力の向上を図るための総合的な方策についても言及された。この背景には、戦後日本の教員養成のための課程（以下「教職課程」という。）については、以下のような課題があったからである。例えば、①教員養成に対する明確な理念の追求・確立ができていない大学があり、「教職課程の履修を通じて、学生に身に付けさせるべき最小限必要な資質能力についての理解が必ずしも十分ではない」こと、②「教職課程が専門職業人たる教員の養成を目的とするものであるという認識が、必ずしも大学の教員の間に共有されていないため、（中略）科目間の内容の整合性・連続性が図られていない」こと、③教職課程の組織編成やカリキュラム編成並びに学

校現場が抱える課題への対応が不十分であること、④「指導方法が講義中心で、演習や実験、実習等が十分ではない」など、実践的指導力の育成が欠けていることなどである。上記の課題を解決していくために、「大学自身の教職課程の改善・充実に向けた主体的な取組が重要である」とされ、また、「教職課程を持つ大学のすべての教員が教員養成に携わっているという自覚を持ち、各大学の教員養成に対する理念等に基づき指導を行うことにより、大学全体としての組織的な指導体制を整備することが重要である」と指摘された[(1)]。

この流れの中、大学の学部段階の教職課程の改善・充実を図るための方策の一つ、教職実践演習の新設・必修化が図られた。教職実践演習の創設のねらいは、以下の通りである。

「教職実践演習（仮称）は、教職課程の他の授業科目の履修や教職課程外での様々な活動を通じて、学生が身に付けた資質能力が、教員として最小限必要な資質能力として有機的に統合され、形成されたかについて、課程認定大学が自らの養成する教員像や到達目標等に照らして最終的に確認するものであり、いわば全学年を通じた『学びの軌跡の集大成』として位置付けられるものである。学生はこの科目の履修を通じて、将来、教員になる上で、自己にとって何が課題であるのかを自覚し、必要に応じて不足している知識や技能等を補い、その定着を図ることにより、教職生活をより円滑にスタートできるようになることが期待される。」[(2)]

このように、教職実践演習は教職課程の集大成科目と位置付けられ、大学の教職課程の質保証、また、教員免許を取得し、初めて教壇に立った時、「即戦力」となれる教員の養成に寄与するものとなった。しかし、適切な授業内容の設定や有効な指導方法、指導体制の構築などについてはほとんど研究が深まらないまま[(3)]、2008年の教育職員免許法施行規則の改正により、「教職に関する科目」として2010年度入学生から必修化された。当初、授業内容や指導を検討するための先行研究は乏しく、教職実践演習の設計理念等に関しては諸学会や各大学での担当者の間でも十分な議論を経ているとは言えず[(4)]、多くの大学

は、手探りの中で大学の実情を踏まえながら開設した。本学も2010年度入学生が４年次を迎える2013年度の後期から開講することになった。実施より数年を経たが、演習の内容と方法は未だ試行錯誤中といえる。

このように、教職課程科目の教職実践演習においては、研究上、実践上多くの課題が残されている。例えば、演習のあり方について、吉住（2015）の指摘のように、新しい科目のゆえに、効果的な指導を模索しなければならず、より質の高い授業指導を行うための理論を構築する必要がある[(5)]。同様に、斎藤（2016）も教職実践演習の展開のあり方、内容や方法による効果の検証を言及しており、多方面の角度からの演習プログラム開発、演習の方法論の確立が求められることを述べている[(6)]。

一方で、演習の組織体制について、深川（2014）は、学生にとって意義のある演習にするために、この科目を教える側（教職実践演習に係る複数の教員）の連携共有が必要であると指摘している[(7)]。また、橋迫・長友（2019）によれば、教職実践演習の担当者（教員組織）として、「教職に関する科目」の担当教員と「教科に関する科目」の担当教員との連携・協力が望ましいが、実際、大学の状況によっては、「教科に関する科目」の担当教員に協力を求めるのは負担が大きいという課題がある[(8)]。

さらに、教職課程の質保証に関しては、青木ら（2018）によれば、「学生一人ひとりの個性や得意・不得意を軽視することなく、『目指す教師像』もそれぞれの学びの履歴の中で更新し続けること」を重視するスタイルをとるために、より具体的なシラバスレベルでの授業改善や個々の演習の運営方法の改善と充実が求められる[(9)]。

以上のことをふまえて、本研究は、まず、本学の教職実践演習の開設した当初の課題と現在の授業設計に至るまでの経緯を述べ、そのうえで、教職実践演習の中、「教員の責任感・使命感・教育的愛情、保護者対応」という内容を中心に、教職課程担当教員のみではなく、受講生の視点から分析し、本学の教職課程の協働的な取り組みの成果と課題を析出する。

なお、教職実践演習には、教員として求められる４つの事項（１．使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項、２．社会性や対人関係能力に関する事項、３．幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項、４．教科・保育内容等の指導力に関する事項）を含めることが求められるが、上述のように、本稿は、「１．使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項」と「２．社会性や対人関係能力に関する事項」の授業実践（第４回、第５回該当）を中心に分析するものである。その他の回の取り組みの検討については別稿に譲る。

１．本学の教職実践演習の創設と変革

本学は、既に記したように、他大学と同様、2013年度に教職実践演習を開設した。それ以来、創意工夫を試みているが、文部科学省の縛りの関係で、基本的構成や内容を変更することはできないので、その枠の中で工夫を凝らしている。

まず、シラバスにおける「授業のねらい」・「講義概要」・「達成目標」を見てみよう。

本学の「授業のねらい」は次のようになっている。

「本科目のねらいは、教職課程の他の授業科目の履修や教職課程外での様々な活動を通じて、受講生が身に付けた資質能力が、教員として最小限必要な資質能力として有機的に統合され、形成されたかについて、最終的に確認することである。この意味で、本科目はいわば全学年を通じた教職課程に関する『学びの軌跡の集大成』として位置付けられる。受講生はこの科目の履修を通じて、将来、教員になる上で、自己にとって何が課題であるのかを自覚し、必要に応じて不足している知識や技能等を補い、その定着を図ることを目指してほしい。」

また、「講義概要」は次の通りである。

「本科目は、その内容として、教員として求められる以下の４つの事項を含んでいる。

①使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項

②社会性や対人関係能力に関する事項

③幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項

④教科・保育内容等の指導力に関する事項

授業形式としては基本的にアクティブ・ラーニング形式を採用しながら、グループ討議、事例研究、現地調査、模擬授業といった多角的方法をとりながら、進めていく。」

さらに、「達成目標」は次のようになっている。

「授業概要に記した４つの事項に対応して、以下の４項目を達成目標とする。

①教育に対する使命感や情熱を持ち、常に子どもから学び、共に成長しようとする姿勢を身に付けている。

②教員としての職責や義務の自覚に基づき、目的や状況に応じた適切な言動をとることができ、さらに、組織の一員としての自覚を持ち、他の教職員と協力して職務を遂行することができる。

③子どもに対して公平かつ受容的な態度で接し、子どもの発達や心身の状況に応じて、抱える課題を理解しながら、豊かな人間的交流を行うことができる。

④教科書の内容を理解しているなど、学習指導の基本的事項を身に付けている。」

この中で、「授業のねらい」と「達成目標」は2013年度から2021年度に至るまで変わらない。変化しているのは「授業形式」であり、アクティブ・ラーニングが基本であるが、具体的には「グループ討議、事例研究、現地調査、模擬授業といった多角的方法をとりながら、進めていく」こととした。なお、現実

的には、2020年度と2021年度は新型コロナウイルスの影響を受けたので、「【遠隔授業に切り替わった場合の実施方法】同時双方向型または資料配布型で行う。遠隔授業の方法は、Teams や Stream を使用するか、KIU ポータル(ユニパ)を使用する。但し、Stream の場合、オンデマンド型ではなく、受講生が Stream に模擬授業動画をアップロードする方式で行う。なお、授業に関する指示はグループ LINE で出すので注意しておくこと。」といったような追記をシラバスに加えるとともに、「現地調査」などはやむを得ず断念したという事情があった。しかし、ともかく、受講生へ様々な授業方法で知的刺激を与え、授業の基本形は変えずに、授業を進化させようと試みて来た。特に、本学のような小規模校の特長を生かして、大規模校ではできないようなティームティーチングによって授業を展開することに心を砕いてきた。

もともと教職実践演習の趣旨としては、「指導教員については、教科に関する科目と教職に関する科目の担当教員が、共同して、科目の実施に責任を持つ体制を構築することが重要である」(10)と言われていたが、実際には、教科に関する科目と教職に関する科目の担当教員が十分に協働して授業を実施することは難しかった。しかしながら、2017年度以降は、教職に関する科目担当教員の定年退職や学部改組に伴う授業の見直し・改善によって、教科に関する科目の担当教員と教職に関する科目の担当教員が、適切な役割分担と緊密な連携の下に、共同して科目の実施に責任を持つ体制を構築することとなった。

2．2021年度教職実践演習の授業実践（第４回～第５回）

本項では、2021年度の教職実践演習の「教員の使命感・責任感・教育的愛情、保護者対応」という内容に関する第４回、第５回の授業実践を説明する。担当教員は、本学教職課程専任教員２名である。

まず、第４回の授業テーマは、「教員の使命感・責任感・教育的愛情」に関する演習である。中央教育審議会2006年答申では、教職実践演習の「使命感

や責任感、教育的愛情等に関する事項」においては、以下のような到達目標と目標到達の確認指標例が示されている[11]。

【到達目標】
・教育に対する使命感や情熱を持ち、常に子どもから学び、共に成長しようとする姿勢が身に付いている。
・高い倫理観と規範意識、困難に立ち向かう強い意志を持ち、自己の職責を果たすことができる。
・子どもの成長や安全、健康を第一に考え、適切に行動することができる。
【目標到達の確認指標例】
・誠実、公平かつ責任感を持って子どもに接し、子どもから学び、共に成長しようとする意識を持って、指導に当たることができるか。
・教員の使命や職務についての基本的な理解に基づき、自発的・積極的に自己の職責を果たそうとする姿勢を持っているか。
・自己の課題を認識し、その解決に向けて、自己研鑽に励むなど、常に学び続けようとする姿勢を持っているか。
・子どもの成長や安全、健康管理に常に配慮して、具体的な教育活動を組み立てることができるか。

上記の到達目標及び目標到達の確認指標例に沿って、第４回の授業では、「教員の教育的愛情とは何か」という問いをめぐって、グループディスカッションという形式で、授業をデザインした。また、工夫した点としては、演習中に提示した事例等は、学校現場で働いている教員の話に基づいたものである。授業記録は以下の通りである。

第４回　教員の使命感・責任感・教育的愛情に関する演習
（2021年10月20日（水）１限）

9：00～9：15

1）導入

①教員に求められる資質・能力についての振り返り

a．いつの時代にも求められる資質・能力　b．これからの時代にとくに求められる資質・能力　c．得意分野を持つ個性豊かな教員

②使命感・責任感についての説明

世の中の知を伝えること、国民・市民を育てること、子どもの教育を受ける権利の保障

9：15～10：10

2）「教育的愛情とは？」の演習（資料1「教育に対する使命感や責任感、教育的愛情についてのワークシート」）

①ワークシート「問1　教員の教育的愛情とは何か」の記入、発表

＜例＞・誠実かつ公平に接する

・子どもとともに学ぶ態度

＜受講生の発表のまとめ＞

・いじめを絶対に解決するという努力　・生徒へのあいさつ

・生徒の意見を頭から否定しない　・子どもに寄り添う態度

・生徒の可能性をつぶす発言をしない　・子どもを認める態度

・時には厳しく、時には優しく　・寄り添って話を聴く

②ワークシート「問2　教員の教育的愛情と親、男女の愛情との違い」の記入、発表（資料2「第Ⅰ章　人間の成長・発達に必要なもの」を読み、教員の教育的愛情と親等の愛情の違いをまとめる）

＜まとめ＞

母親の愛情：受容的な姿勢や傾聴的態度

父親の愛情：子どもの壁になる毅然とした態度

上記のほか、教員として、子どもの気持ちを理解し、共感し、子どもと信頼関係をつくり、子どもの自立へのサポート、子どもの自己存在感を引

き出す必要がある。

・教員と生徒との結婚について

　生徒に対して公平性を保って接することが教員に求められると説明した。

10：10～10：20

３）教員の愛情と母性、父性問題についての説明（資料３「第二章日本人の心の問題」）

10：20～10：30

４）資料４「教師に求められる資質能力に関する記述－『令和の日本型学校教育の構築』を目指して（答申）」を通して、教員の使命、責任、目指すべき姿を説明した。

※紙幅の関係上、上記資料１～４は本稿中に掲載しない。

次に、第５回の授業テーマは、「保護者対応」に関する演習である。中央教育審議会2006年答申では、教職実践演習の「社会性や対人関係能力に関する事項」においては、以下のような到達目標と目標到達の確認指標例が示されている[12]。

【到達目標】

・教員としての職責や義務の自覚に基づき、目的や状況に応じた適切な言動をとることができる。

・組織の一員としての自覚を持ち、他の教職員と協力して職務を遂行することができる。

・保護者や地域の関係者と良好な人間関係を築くことができる。

【目標到達の確認指標例】

・挨拶や服装、言葉遣い、他の教職員への対応、保護者に対する接し方など、社会人としての基本が身についているか。

・他の教職員の意見やアドバイスに耳を傾けるとともに、理解や協力を得ながら、自らの職務を遂行することができるか。
・学校組織の一員として、独善的にならず、協調性や柔軟性を持って、校務の運営に当たることができるか。
・保護者や地域の関係者の意見・要望に耳を傾けるとともに、連携・協力しながら、課題に対処することができるか。

上記の到達目標及び目標到達の確認指標例に沿って、第５回の授業では、高校の三者面談の場面を想定し、生徒指導（スマートフォンへの対応）と進路指導の問題を設定して、教員はいかに保護者と対話をするかについて、ロールプレイという形式で、授業をデザインした。また、工夫した点としては、演習中に提示した三者面談の事例及び保護者対応の仕方等については、学校現場で働いている教員の話、アドバイスに基づいたものである。授業記録は以下の通りである。

第５回　保護者対応等に関する演習（2021年10月27日（水）１限）

9：00～9：15

１）前回の振り返り

資料１「教育的愛情とは？前回の振り返り」に基づき、前回の振り返りと小括を行った。

9：15～9：35

２）保護者対応のロールプレイの説明（資料２「保護者対応のロールプレイワークシート」）

受講生は保護者役、生徒役、学級担任役、記録役を決め、資料２に基づき、それぞれの役のセリフ（作戦）を考えた。

9：35～10：05

３）保護者対応のロールプレイ：設定１　生徒指導（スマートフォン対応）

概要：Ｙ君は長時間にわたりスマートフォンでゲームをしている。勉学への悪い影響について心配しているＹ君の母親は、学級担任のＳ先生へ相談した。Ｓ先生は、Ｙ君のゲーム好きということについて理解を示したうえで、スマートフォンの時間制限機能を使い、ゲーム時間の制限をかけるように指導した。また、母親に対して、スマートフォンの親による管理について協力するように呼び掛けた。スマートフォンをＹ君に渡した理由について、スマートフォンを使って、資料などをいろいろと調べやすくなるため、クラスメートがみんな持っているため、国立難関校へ受験させるためであった。Ｓ先生は、Ｙ君の資料等を調べる方法を変えたり、本人のやり方で少しずつスマートフォンを離れるように指導した。また、国立難関校の受験についても言及した。(10分間)

①三者面談後、それぞれの役への思いや学級担任によるスマートフォン指導の難しさを共有・共感した。

②教職課程担当教員２名はそれぞれ受講生の演じた三者面談へコメントをし、指導上の注意点などについて話した。

10：05～10：30

３）保護者対応のロールプレイ：設定２　進路指導

概要：Ｓさんの第一志望は国立難関校Ｋ大学である。しかし、これまでの模試はＥ判定が続いている。三者面談では、Ｓさんは「第一志望は譲らない」という態度を変えなかった。Ｓさんの父親は、娘によりよい大学に行かせたい気持ちを持ち、学費のことを踏まえると、国公立大学の希望だという。学級担任のＮ先生は、まず、Ｓさんの国立難関校Ｋ大学の志望理由を確認した。オープンキャンパスの時、ほかの大学、ほかの学部と比べて、国立難関校Ｋ大学が一番楽しそうだという理由を聞いたうえで、将来何をしたいかについて考えたうえで、大学を選ぶように指導した。また、ＳさんとＳさんの父親に対して、現状としてＳさんの第一志望の国立難関校Ｋ大学の合格が難しいことと、浪人になってもよいかについても確認し

た。それに対して、Ｓさんはやはり第一志望を変えない、父親も、娘の意志を尊重するという思いを語った。担任のＮ先生はしっかりとサポートすることを伝えた。(10分間)
①三者面談後、それぞれの役への思いや学級担任による進路指導の難しさを共有・共感した。
②教職課程担当教員２名はそれぞれ受講生の演じた三者面談へコメントをし、指導上の注意点などについて話した。
※紙幅の関係上、上記資料１～２は本稿中に掲載しない。

３．教職実践演習の成果と改善点

前項の授業実践に基づき、2021年度教職実践演習の受講生（７名）を対象に「教職実践演習の内容・形式に関するアンケート」を実施した。有効回答は４件である[13]。本項では、このアンケート調査の結果に基づき、教職実践演習の「教員の責任感・使命感・教育的愛情、保護者対応」に関する取り組みの成果と課題を述べる。便宜上、有効回答の４名の学生を学生Ａ、学生Ｂ、学生Ｃ、学生Ｄとする。

⑴　第４回授業アンケートの分析

まず、第４回の授業においては、「教職の意義や教員の役割、職務内容、子どもに対する責務を理解していますか」という項目に対して、受講生４名は全員、受講前後に自分の成長・変化を感じたという。具体的には、「教員の使命感や責任感、教育的愛情に対する理解について、第４回の【受講前】と【受講後】を５段階（５…よくできる　４…ある程度できる　３…どちらともいえない　２…あまりできない　１…できない）で自己評価してください」という問いに対して、３名の回答を見る限り、受講前と比較して、受講後の自己評価が

高いということがわかった（例えば、学生Ｂ：受講前３→受講後４、学生Ｃ：受講前４→受講後５、学生Ｄ：受講前２→受講後３）。なお、学生Ａの場合、「受講前５→受講後５」という回答であったが、「教育的愛情の意味への理解が深まった」という。

次に、「第４回の授業を振り返って、最も印象が残る内容・授業形式を記入してください」という問いに対して、３名の受講生の回答を得た。

学生Ａ：父親的愛情と母親的愛情のところが印象に残った。
学生Ｂ：学生が教育的愛情とは何かについて自分なりの意見を出し合った際、自分と同じような回答が多くて教育にかかわる人の考え方はかなり似通っていたということや、具体的な意見が参考になった。
学生Ｃ：教師の教育的愛情についての他の学生が言っていた「生徒の意見を否定しない」、「生徒の可能性をつぶす発言をしない」というのは大事だと感じたので一番印象に残っている。

このように、授業内容に関しては、教員の教育的愛情を語る場合、親の愛情との比較によって、理解が深まりやすいということがわかった。また、グループディスカッションという形式をとることで、受講生同士の情報共有によって、共感を得やすく、多様な意見を聞くことで受講生の考えを深めていることがわかった。

さらに、「第４回の授業を通して、ためになったこと、鍛えられた資質・能力、また、今後教職に就くうえで役に立つ点などを中心に記述してください」という問いに対して、以下の回答を得た。

学生Ａ：教育的愛情の意味への理解が深まった。今後も教育的愛情について考えたいと思った。
学生Ｂ：教職に就く上で、今回学んだ教育的愛情とは何かということ、そ

して何故それを持っていなければならないのかという考えはためになるし、常に持っておきたいと思った。
学生Ｃ：教育的愛情とは何か、具体的にどういうことがあげられるのかをしっかり理解することができた。また、これと親等の愛情との違いはどういうものがあげられるかも、他の生徒の意見も聞いたことでよく理解することができた。
学生Ｄ：教員はただ教えることだけではなく、教育的愛情というものも重要視していかないといけないと感じた。

これらの発言から推して、第４回の授業を通して、到達目標である「教育に対する使命感や情熱を持ち、常に子どもから学び、共に成長しようとする姿勢が身に付いている」、「高い倫理観と規範意識、困難に立ち向かう強い意志を持ち、自己の職責を果たすことができる」という点においては、一定の効果が見られたといえる。

最後に、「第４回『教員の使命感や責任感、教育的愛情』の授業を振り返って、授業の内容や形式など、改善してほしいところを記入してください」という項目に対して、４名の受講生のうち、３名は「このままでよい」、「特にない」と答えたが、１名は、「実際に働いている中学、高校の教員が思う教育的愛情とは何か、それをどう行動にうつすようにしているかを聞いてみたいと思った」と回答している。実際、教職課程担当教員は、事前に高校の教員の話を聞き、まとめた事例・知見を授業中に説明していたが、リアルさが欠けているゆえに、受講生は現場の教員の生の声を求めていた。学校現場で働いた時にすぐに生かせる「経験談」をいかに授業中に入れ込むかは今後の検討事項になるだろう。

⑵　第５回授業アンケートの分析

第５回の授業の受講生は３名であるため、３名の受講生の回答を中心に分析

する。まず、「保護者や地域との連携・協力の重要性を理解していますか」、「他者と共同して授業を企画・運営・展開をすることができますか」という項目に対して、受講生３名全員は、受講前後で自分の成長・変化を感じたという。また、「保護者対応などについて、第５回の【受講前】と【受講後】を５段階（５…よくできる　４…ある程度できる　３…どちらともいえない　２…あまりできない　１…できない）で自己評価してください」という問いに対して、２名は受講前と比較して、受講後の自己評価が高いということがわかった（例えば、学生Ｂ：受講前２→受講後４、学生Ｄ：受講前２→受講後３）。なお、学生Ａは、受講前５→受講後５という回答であったが、「ロールプレイで三者面談をした時実際の三者面談が想定できてタメになった」という。

次に、「第５回の授業を振り返って、最も印象が残る内容・授業形式を記入してください」という問いに対して、それぞれの回答は以下の通りである。

学生Ａ：ロールプレイで三者面談をした時実際の三者面談が想定できてタメになった。
学生Ｂ：まずはじめに先生役としてロールプレイしたとき、生徒とその保護者の両方の意見を聞き、そこからまとめて良い解決策を導き出す難しさを実感したのが印象に残っている。
学生Ｄ：三者面談を体験して、もしモンスターペアレントの家庭と面談することになったらすごく大変なんだろうなと思った。

このように、ロールプレイという形式をとることで、学校現場に近い形で、受講生の当事者意識を引き出すことに成功した。また、受講生にとって教育実習中でも経験できなかった三者面談と保護者対応を行うことで実際教員として働くときに役に立つという点において意義があった。

さらに、「第５回の授業を通して、ためになったこと、鍛えられた資質・能力、また、今後教職に就くうえで役に立つ点などを中心に記述してください」

という問いに対して、以下の回答を得た。

学生Ａ：保護者と話すスキルを鍛えられた。親の気持ちになれた。
学生Ｂ：ロールプレイを行ったことで、自分が予想もしなかった場面の対処や臨機応変の重要性の理解、そしてそれを行う力が少し身についたのではないかと思う。
学生Ｄ：保護者、生徒と面談する時には、なるべく正確に保護者と生徒の考えを読み取って、最適な指導や説明ができる力は身につけるべきだし役立つ。

これらの発言から推して、第５回の授業を通して、到達目標である「教員としての職責や義務の自覚に基づき、目的や状況に応じた適切な言動をとることができる」、「保護者や地域の関係者と良好な人間関係を築くことができる」という点においては、一定の効果があったといえる。

最後に、「第５回『保護者対応等』の授業を振り返って、授業の内容や形式など、改善してほしいところを記入してください」という項目に対して、３名の受講生のうち、１名は「このままでよい」と答えた。残り２名は、それぞれ「学校現場で実際にあった対応、特に教員が難しいと感じた対応を参考程度に知りたい」と「もう少し受講人数が多ければいろんな三者面談のやり方があったと予想しているが、受講生の中には教育実習期間だったりそもそもの受講人数が少なかったり物足りなさは感じた」と回答した。これは、学校現場の実態と対策を取り入れてほしいという要望と、受講生の人数が少ないため多様な意見を得にくいという指摘であると考えられる。いずれもこれまで以上に学校現場の実例と対策、多様な知見をいかに取り入れるかがポイントになるだろう。

⑶　小括

以下、第４回と第５回の授業実践による成果と課題をまとめる。まず、成果

として次の３点を挙げることができる。第一に、教員の教育的愛情と親の愛情の違いを分析しながら、学生同士によるグループディスカッションという形式を通して、教員の責任感・使命感、教育的愛情への理解を深めることができたといえる。第二に、保護者対応というテーマに関しては、「対生徒」を中心とする教育実習中でも体験できない「対保護者」という取り組み自体、学生にとって新鮮でありかつ実用的であった。また、ロールプレイという形式によって学生の当事者意識を芽生えさせることができた。第三に、教職課程担当の複数の教員の連携により、授業設計及び実践上、より客観的、多元的にテーマに応じた議論ができており、学生へよりよい知見の提供ができ、またよりきめ細かい指導・サポートができたといえる。これは、教職課程の質保証につながるものであるともいえる。

一方で、課題として以下の２点が考えられる。第一は、中学校、高校で働いている教員がいない場合、学校現場の教員をめぐる実態、そのリアルさをいかに大学の授業中に提示するかという課題である。今後、中学校、高校の経験者（教員）による講話の設定や、教職課程担当教員による学校現場の実例の集約・厳選・共有について検討する必要がある。第二は、受講生人数の少なさにより学生同士の意見・示唆が多様性に欠けていた点である。これについて、例えば本学の教職課程履修生の異学年交流や他大学の教職課程の学生との交流を図ることなど、今後、学生同士の意見の多様性を担保する方策を講じる必要があるだろう。

おわりに

本研究は、教職課程における協働的な取り組みを検討するために、本学の教職課程の集大成の科目である教職実践演習に着目した。４つの領域によって構成される教職実践演習の内容の２つ（「１．使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項」と「２．社会性や対人関係能力に関する事項」）を中心に授業実

践を紹介した。そのうえで、学生の変化・成長、身につけた資質・能力を中心に、教職実践演習の第４回と第５回授業の取り組みの成果をまとめた。そして、その成果として、①学生同士によるグループディスカッションやロールプレイといった授業形式の有効性、②教育実習中でも体験できないような課題の設定や事例の提供は、学生にとって新鮮でありかつ実用的である点、③複数の教員の連携によって教職課程の質保証につながった点について明らかにした。このように、上記の領域においては、学生の変化・成長が見られ、学生から実際教壇に立つ時、役に立つという意見もあり、「即戦力」を持つ教員の養成に一定の成果があったといえる。また、教職課程の質保証を図るために、教職課程担当教員間の連携・協働の重要性が再確認できた。一方で、中学校、高校の経験者（教員）との連携や、教職課程学生同士の交流の図り方についてまだ検討の余地が残っていることも分かった。

上記のように、本稿は、教職実践演習の２つの領域のみ分析した。ほかの領域、例えば、「３．幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項」、「４．教科・保育内容等の指導力に関する事項」や、履修カルテの活用などの取り組みの成果と課題を明らかにすることは今後の課題とする。

註

(1) 中央教育審議会(2006)「今後の教員養成・免許制度の在り方について(答申)」https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1212707.htm（最終アクセス日：2022年１月27日）

(2) 同上。

(3) 高橋望（2008)「教員養成制度改革に関する一考察―教職実践演習（仮称）の導入過程に焦点をあてて―」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』第57集第１号、pp. 87-101。

(4) 青木一・伏木久始・畔上一康・林寛平（2018)「教職実践演習の授業設計理念と質保証の取り組み―信州大学教育学部の５年間の実践における意義と課題―」『信州大学教育学部研究論集』第12号、pp. 157-173。

⑸　吉住香織（2015)「教員としての課題を確認する『教職実践演習』の取り組み～学びの振り返りと課題理解の深化を目指して～」立教大学教職課程『教職研究』第27号（臨時増刊)、pp. 111-118。

⑹　齊藤ゆか（2016)「課題探求能力を高める『教職実践演習』のあり方―学校教育及び生涯学習が扱う『社会』の検討から―」『神奈川大学心理・教育研究論集』第39号、pp. 71-79。

⑺　深川八郎（2014)「『教職実践演習』の取り組みと課題」『摂南大学教育学研究』第10号、pp. １-６。

⑻　橋迫和幸・長友道彦（2019)「『教職実践演習』のカリキュラム開発の成果と課題―九州保健福祉大学教職課程の取り組み―」『九州保健福祉大学研究紀要20』pp. ９-18。

⑼　青木・伏木・畔上・林（2018)、前掲註⑷

⑽　中央教育審議会（2006)、前掲註⑴

⑾　同上。

⑿　同上。

⒀　本アンケートは2022年１月20日から１月23日にかけて、受講生７名を対象に、Forms を通して実施したものである。新型コロナウイルス感染症の流行により、一部の高校は、教育実習期間について春から秋へ変更したため、秋学期開講した教職実践演習の第４回、第５回の授業を行った時、７名の受講生のうち、３名は教育実習中であった。そのため、実際授業を受けた受講生は４名であり、アンケートの有効回答は４件となる。

Research on Collaborative Efforts of Faculty Members in the Teacher Training Course: Focusing on "Teachers' sense of responsibility, mission, pedagogical love, and interaction with parents" in the Practical Seminar for Teaching Profession

Chuan Yang, Katsunobu To

The Practical Seminar for Teaching Profession was the culminating subject of the teacher training course. It was made compulsory for the 2010 batch of students who are in the course with little research done on setting up appropriate content, effective teaching methods, and building a teaching system.

This paper aims to analyse the content of the Practical Seminar for Teaching Profession from the perspective of the students and the faculty members in charge of the teacher training course. It also intends to investigate the achievements and future tasks of the Practical Seminar for Teaching Profession in Kyushu International University.

The results of the research are as follows: (1) Group discussions among students were very effective, and role-playing developed a sense of responsibility. (2) The interaction with parents, which cannot be experienced during the training, was useful for the students. (3) Collaboration among multiple teachers in charge improves the quality of the teacher training course.

However, in areas such as teachers' sense of responsibility, mission, pedagogical love and interaction with parents, there is room for further research on how to collaborate with experienced teachers of junior high schools and high schools, and how to promote interaction among students in the teacher training course.